

平成 29 年度 禅ブランディング事業 自己点検・評価結果を踏まえた
外部評価委員による検証・評価シート

禅ブランディング事業 外部評価委員

氏名 西田正法



(1) 事業全体に対する評価
当該事業の適切性・妥当性について
禅を一言で表せば「縁起の体感」ではなかろうか。第二次大戦後協調を歩み始めた世界であったが、また対立の中で混迷を深めている。斯かる世界情勢の中で、縁起の体感を根底とした禅からの提言は、対立しながら平和を希求する人々に対して、新たな視座を開くことは疑いのないことである。本事業の適切性・妥当性は、世界的な注目を集める禅を、客観的学問的立場から正しく伝えることで、仏教が有する縁起に立脚した智慧を、理性的に世界に伝える機会を創出出来ることにあると思う。8 学部、1 研究科が連携して進める本事業は、関係者自身がこの縁に出遭えたことを喜びとして、この善縁を世界に広げる意気込みで取り組んで下さるよう願います。
当該事業による目的の実現可能性について
自己点検・評価の②において「禅ブランディング事業参加教員や学内向けの勉強会・イベントを多く開催したが、外部向けのイベントが少なかったことが課題であった。」とあったが、広汎に渉る本事業は、先ず関係者全員が禅に対する理解を共有することが事業成功の鍵となると思う。次に、本事業がエゴ（個人・国家・民俗・宗教）により行き詰まった世界情勢に、大きな一石を投ずる有意義なものであるという本事業の価値を共有し、学長を基点に全学的ネットワークを構築することが事業の第一歩と考えると、先ずは学内の充実が大切であると思う。

(2) 受容と展開チームの事業評価
当該事業の適切性・妥当性について
禅の受容と展開チームの事業内容は、『新纂禅籍目録』データベースの作成を中心に、高度に専門的であることから禅研究者に資する役割は大きいと思うが、歴史上の受容と展開に力点が掛かっており、本事業当初の目的、「現代人が抱える心の問題に対し、新たな提言」や「禅の研究を超領域的に行うことを通し、新たな視座を獲得」との乖離を感じる。論語に「温故知新」の名言もあるが、3 回開催の講演会で合計 90 名の参加者というのは、視座が専門家に偏っているからか。
当該事業による目的の実現可能性について
研究者に資する資料の整理や公開は大事なことであるが、自己点検・評価③に「研究者以外の参加者からは内容がやや難解との指摘もあった」とあるように、禅が一般人からも興味をもたれるような講演会や、他チーム等と連携する「坐禅とお粥の会」に力を入れるなど、裾野を広げることで目的の実現を図っては如何か。

(3) 源流チームの事業評価	
当該事業の適切性・妥当性について	世界的な広がりを見せる禅（Zen）も、その内容は様々である。禅研究の最高峰である駒澤大学が、禅の歴史的展開やその内容について明らかにし、その成果を公開してゆくことは時代の要請であるかも知れない。ただ、駒澤大学の禅学実習をはじめ国内修行道場においても、坐禅に対する綿密な指導が行われていない。この現実を打破するためにも、当チームが学術的立場から正しい坐禅を提言することは、実に大きな意味を持つと言える。
当該事業による目的の実現可能性について	後から設置された源流チームではあるが、本事業の中核となるべき存在であると思う。経典や論書をはじめとする文献を渉猟した学術研究の立場から坐禅を明らかにし、その内容を具体的に平易なものとして世に送り出すことは、駒澤大学だからこそ可能なことであろう。研究成果を、学生を対象として実施し、「学んだことのたった一つの証明は変わる」との故宮城教育大学学長林竹二先生の金言を、駒澤大学が禅を学風として実現することは可能なのではないか。

(4) 人の体と心チームの事業評価	
当該事業の適切性・妥当性について	受容チーム・源流チームとの密接な連携、正しく坐禅に取り組む実践者の招聘により、本チームが果たす役割は、個人的体験でしかなかった禅に客観性を与える画期的なものとなると思う。 実際には、具体的「坐」に真摯に綿密に取り組まなければならない道元禅師の「只管打坐」は、現状では精神面が優先してしまっている。身心一如を精神的問題としてしまっている現状を打破し、本当の身心一如を客観的に明かすることは、正しい坐禅を伝えることになる。
当該事業による目的の実現可能性について	本チーム事業の実現可能性は、上記のチーム間の連携と優れた禅者の招聘が鍵となろう。現時点で、只管打坐を伝えることが出来る僧侶は五指に及ばないのではないかと思う。闇雲に被験者を募ってデータを取っても意味はなく、正しい指導のもとに正しく行じられる坐禅のデータこそが意味を持つ。「宗教」というベールに包まれ、個人体験という神秘性を楯に不明瞭であった坐禅を、本チームが客観的事実として証明することは可能であり、実に大きな働きを為すであろう。

(5) 現代社会チームの事業評価	
当該事業の適切性・妥当性について	本チームの特色は、新たに禅に触れることにあり、専門外から禅に触れ、学び、実践する中で、自らを被験者的に観察し、その具体的変化を踏まえ、社会に還元提言することで、禅に関わる学者や僧侶の提言とは異なる説得力を持つことにあると思う。まずは、真摯に禅について学ぶ姿勢を優先し、学びの中で感じた忌憚りの無い感想を述べ合うことで、一般社会での禅の有用性が明らかになるであろう。禅に対する外部からのアプローチには大きな意味がある。
当該事業による目的の実現可能性について	

「将来に向けた発展方策」にある、視察PJや学際研究PJを継続し、世界的なZenの現状把握と、メンバー個人が一社会人として真摯に禅を学ぶことで、自らの変革体験も研究成果に含めたフォーラムPJを目指すならば、本チームの独自性を実現出来ると思う。

(6) 発信事業チームの評価

当該事業の適切性・妥当性について

閉塞する世界的社会情勢を視野に、禅(Zen)を世界に発信してゆくことの意義は大きい。情報化社会にあって、従来禅寺では「来る者は拒まず」的姿勢で臨んでいた。勿論、禅の普及を海外にもたらした先駆者はあったが、個人的活動の範囲であった。今、宗教団体としてではなく、学術機関である大学が、禅についての情報を世界に発信しようとする事は、社会的意義を有すると共に、駒澤大学自体の価値を高めることになる。

当該事業による目的の実現可能性について

〈自己点検・評価〉に、「禅と駒澤大学の関係性があまり認識されていない」との調査報告があったが、世界に向けて発信する以前に、駒澤大学が禅を核にした教育体制を目指し、現代の若者とひと味違った学生を育てることこそが、最高のブランディングとなるのではないか。本チームの存在価値は、本プロジェクトの達成内容に左右されよう。全学体制で禅ブランディングに臨んで得られた、具体的成果を発信することが出来れば、発信事業チームが駒澤大学を禅ブランドとして、世界に知らしめる可能性は大であろう。

(7) 事務部門の事業評価

当該事業の適切性・妥当性について

8学部・1研究科、研究・発信5チームの大所帯が円滑な活動を行う為には、無くてはならない部門で、正に「縁の下の力持ち」的存在。煩雑な事務を円滑に進めて下さるよう期待する。

当該事業による目的の実現可能性について

煩雑な事務や会計は、部外者の理解を超えたものであるが、報告・計画で見える限り円滑に進められていることと推察する。〈自己点検・評価〉にあった「研究チームサポートについて、一部の教員から十分ではなかったとの指摘があった」との記載が見られことが気になる。

その他、要望や改善が望まれる事項について

研究機関であると共に、教育機関でもある大学が目指すブランディングは、画餅であってはならない。学問的、客観的研究に終始することなく、本事業を好機と捉え、駒澤大学をして禅ブランディングに相応しい大学となるよう、禅を核とした独自性ある教育機関を目指し、人間の尊厳を示せるような学生の育成に取り組んで欲しい。駒澤大学が目指すべき禅ブランディングとは、学生が変わることこそ本筋であろう。

平成 29 年度 禅ブランディング事業 自己点検・評価結果を踏まえた
外部評価委員による検証・評価シート

禅ブランディング事業 外部評価委員

氏名 趙 佑 鎮

(1) 事業全体に対する評価
当該事業の適切性・妥当性について
<p>平成 28 (2016) 年度に採択された本事業は、『禅と心』研究の学際的国際的拠点づくりとブランド化事業に向け、禅を中心とした学部横断的な連携による新しい研究領域の開拓として、駒澤大学における既存研究実績の蓄積をさらに深化させ、また新たな視点を取り入れ進化していく本事業は、駒澤大学をより一層発展させるための駒澤ブランドを明確にする事業足り得るものであり、その適切性・妥当性について高く評価する。</p> <p>また、各チームにおける研究テーマ設定が、大学のステークホルダーと一般社会人に興味を誘発させるようになっており、大学ブランディングに広く貢献できるものと思われる。</p>
当該事業による目的の実現可能性について
<p>禅ブランディング事業 5 ヵ年計画の 2 年目となり、チーム毎の研究内容も本格的となり、関係部門との連携による活発な勉強会・研究会が多数開催され、より深まりと広がりが期待できる展開になっている。また、ウェブサイトの特設ページにより研究事業が的確に発信されており、今後の研究と発信の充実により、目的の実現に非常に期待が持てる。</p> <p>何よりも大学内の学部と事務局横断の組織体制を意識しており、かつ、HP のコンテンツと外部向けのイベントの少なさを課題として自己認識しているだけに、マーケティング志向に立脚した今後の着実な事業展開ができるものと予想する。</p>

(2) 受容と展開チームの事業評価
当該事業の適切性・妥当性について
<p>禅の日本社会への受容に関する研究については、禅が日本社会に及ぼした影響を踏まえ、影響の拡大をはかるべき道を模索する研究は、非常に意義があり適切かつ妥当である。コンテンツ作成に特に力を注ごうとする当該事業は、本ブランディングを内外に印象付ける中心的存在といえるであろう。</p>
当該事業による目的の実現可能性について
<p>研究に必要なデータベースの作成作業が着実に進行しており、さらなる充実に向けた調査等が次年度に行われることが期待され、目的の実現可能性が高いと評価する。他の研究チームや学内外へ向けた禅に関わる勉強会・研究会の数多くの開催を期待するものである。</p>
(3) 源流チームの事業評価

当該事業の適切性・妥当性について
<p>禅ブランディング事業としている限りにおいて、避けて通れない曹洞禅の源流の研究は、本事業の基幹となるべき研究であり、土台となるものと思われる。新しい視点を積み上げる際にも歴史を知ることの重要性は言うまでもなく、非常に適切かつ妥当である。展開チームと源流チームは共に、歴史的研究アプローチが主であるが、源流チームが新たにつくられた意義は十分理解できるものであり、歴史的視座をしっかりと固めようとする姿勢は高く評価できる。</p>
当該事業による目的の実現可能性について
<p>他チームより開始が遅れたため、平成 29 年度の活動については不十分な点もあったかと思うが、しっかりした既存研究をもとに、今後十分に研究を実行できるものと期待できる。駒澤大学が有する曹洞宗関連の貴重な文化資産を、日本文化のオリジンの一つとして位置付けしようとする流れは、ブランディング事業として有意義である。</p>

(4) 人の体と心チームの事業評価	
当該事業の適切性・妥当性について	<p>「禅」の世界的な注目から、現代社会に潜む「心の問題」に焦点を当て、またそれを印象論ではなく、実際の坐禅体験や脳波測定や、MRI を活用した科学的な解明に踏み込む研究として、非常に適切であり妥当である。現代社会における問題の多くの所在が、「心」と「体」にあるだけに、それらを実証的に論じ、またその一部を問題解決までしようとする姿勢は、大学の具体的な社会貢献につながるものと期待する。</p>
当該事業による目的の実現可能性について	<p>禅の知識を深める一方で、坐禅会に参加しての実験を並行しておこない、また他チームとの積極的な連携をおこない、目的実現は十分に期待できる。一般社会人に対して一層興味をもたせ、当該事業に関わらせる機会を、諸々の工夫で増やすことが、目的の実現度合いを高めさせるだけに、ブランディング事業の要諦といえるであろう。</p>

(5) 現代社会チームの事業評価	
当該事業の適切性・妥当性について	<p>禅と社会制度の研究において、禅を夫々の専門分野の視点から研究をおこない、視察・学際研究・フォーラム・出版の事業を進めることは非常に重要であり適切かつ妥当である。経営学部 の教員が多くかかわっていることもあり、現代の社会制度に求められる経営理念や経営者の意識、ダイバーシティ、サステナビリティ等の思想やその実践に、禅がどのように活かされるかを明らかにすることを目標にしていることは、日本の企業社会にとって有意義であろう。</p>
当該事業による目的の実現可能性について	<p>平成 29 年度においても、様々な視察がおこなわれ個人研究も順調に進んでいる。シンポジウムも開催され、今後出版に向けて確実に実現に向かって進行しており期待ができる。多くの視察・研究・出版 PJ をかかっていることは大変好ましい。</p>
(6) 発信事業チームの評価	

当該事業の適切性・妥当性について
<p>禅の情報発信というまさにブランディングを WEB サイトや様々なサイト誘導企画により、的確に鋭く発信をすることは、非常に重要であり、適切かつ妥当である。</p>
当該事業による目的の実現可能性について
<p>電通との企画による WEB サイトを開設し、WEB サイトに掲載する様々な企画も順調に進行している。また、マーケティング調査も実施し、目的実現に向けて大いに期待ができる。調査のなかで、一般の人に駒澤大学を想起させるものはないこと、禅と駒澤大学の関係性があまり認識されていないというシビアな現状認識を得たことは、この事業の意義と目的の実現可能性を高めさせる大きな転機となったものと理解する。</p>
(7) 事務部門の事業評価
当該事業の適切性・妥当性について
<p>本事業を円滑に遂行し、成果をあげるべく、連絡会・プレス対応や各種サポートについて関係各所と連携し、適切かつ確実におこなった。ブランディングへの全学的取り組みを「支援」する事業として、その重要性を評価したい。</p>
当該事業による目的の実現可能性について
<p>しっかりした体制での業務が遂行されており、目的実現が期待できる。</p>
その他、要望や改善が望まれる事項について
<p>現在までの進捗状況から鑑み、また、全てのチームのブランディング事業における使命と目的目標も各々しっかりしているため、特に要望や改善を指摘する箇所はない。強いていうなら、より一層の学長リーダーシップの関わりを明記し、それらのマネジメントを期待する。また、グローバル化の観点から、アジア的価値観からの日本独特の禅を、研究と実践（例えば、グローバルなネットワーキング）の両面で、よりエッジの効いた実りあるものにすることも併せて期待したい。</p>